

研究主題 **自他を大切にし、よりよく生きようとする児童の育成**
～多面的・多角的に考えるための発問や交流活動の工夫を通して～

1. 主題設定の理由

道徳が教科化されて今年度で6年目を迎えたが、その間、児童を取り巻く世界はめまぐるしく変わってきた。情報技術の発達や新型コロナウイルス感染症の流行などが、児童の生活に多大な影響を与え、ともすれば誤った情報に流され、人と人とのつながりが希薄になってしまう危険性がある。このような児童によりよい自己の生き方について考える道徳の時間を保障することは大切なことである。

(1) 児童の実態

本校の児童の実態として、次の点が課題として挙げられる。

- ・道徳の時間、自分のこととして考えるという意識が低い
- ・善悪の知識はもてても、実際の場面では正しい判断ができていないことがある
- ・自分に自信がもてず、考えはもててもそれをなかなか発表できない
- ・議論をすることに対して苦手意識が高い
- ・お互いの意見を比較したり、そのよさに気付いたりすることがなかなかできない
- ・相手の意見を取り入れつつ、自分の考えを深めることがなかなかできない

(2) 教師の実態

本校の指導者の実態として、次の点が課題として挙げられる。

- ・発問を練り上げる経験が少ない
- ・多面的、多角的に考える発問をすることができたかについて振り返っていない
- ・今までの日常生活や経験と本時の道徳的価値との接点を明確にすることが不十分である
- ・自分の立場や考えを明確にするための具体的な手立て、考えの可視化が不十分である

以上のことから、「自他を大切にし、よりよく生きようとする児童の育成」を主題として、道徳的諸価値を理解したうえで、自分事として捉えて考えることのできる発問の工夫を行うこと、互いの考えを伝え合い共有しながら、自分の考えを広めたり深めたりできる交流の工夫を行うこととした。

2. 研究のねらい

道徳の授業で、道徳的諸価値について自分事として捉えて考えさせたいうえで、互いの考えを伝え合い共有しながら、自分の考えを広めたり深めたりすることを通して「自他を大切にし、よりよく生きようとする児童の育成」を目指す。

3. 研究主題について

(1) 自他を大切にし、よりよく生きる

自他を大切にし、よりよく生きるとは、道徳的諸価値を多面的・多角的に捉え、自他の考えを大切にしながら自己の生活を振り返ることであり、一つの事象に対する様々な感じ方や考え方をもとに、よりよい自己の生き方について考えを深めることである。

4. 研究の内容

(1) 多面的・多角的に考えるための発問について

ねらいを踏まえて、主人公や教材に対する「立ち位置」を変えた発問を意図的に使い分けていくことにより、児童の多角的・多面的な思考を促していく。

「立ち位置」を変えた発問とは、東京学芸大学の永田繁雄教授の考え方によるもので、「主人公に自分を重ねるか、離れた視点から客観的に見るかの距離感」を横軸、「主人公の内面や行為の理由などを明らかにするか、自分自身の考えを明確にするか」を縦軸として、これらの縦横により「A 共感的発問」「B 分析的発問」「C 投影的発問」「D 批判的発問」の四つに発問を整理・区分する考え方である。

この区分をもとに、本研究では、AとBを多面的な視点に立つ発問、CとDを多角的な視点に立つ発問として捉えていく。授業者がこの視点の違いを意識して、基本発問では多面的な視点に立つ発問、中心発問では多角的な視点に立つ発問を行い、四区分の発問を意図的に使い分けていくことで、児童の見方や考え方を広げ、多面的・多角的に考える学習を充実させていく。特に中心発問では「自分ならどうするか、どのように考えるか」を重視した発問にしていくことで、児童が自分事としての意識を高めながら価値理解を深められるようにする（図1参照）。

(2) 交流活動について

多面的・多角的に考えるための発問を踏まえ、児童が発問について考えていく際、次の3点を意識した交流活動を行い、一人ひとりが自信をもって話し合い、考えを深めていけるようにする。

- ① 話し合いでの視点の明確化
- ② 自分の立場や考えの明確化
- ③ 考えの可視化（思考ツールの活用・ICTツールの活用・ネームプレートの活用）

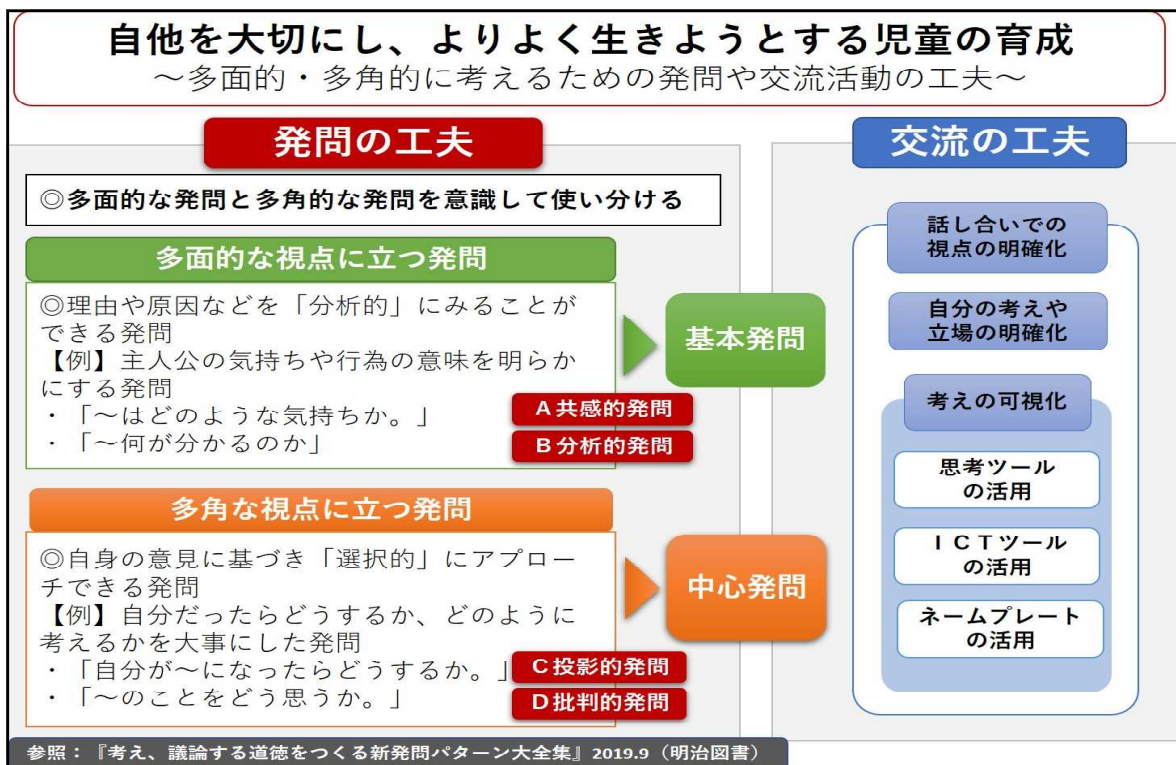


図1 研究構想図

(3) 導入における問題意識の向上

生活経験と結び付けて考えることができるよう、自分たちの意識を客観的に捉えることができるアンケートや画像などの資料を提示し、問題意識を喚起する問い掛けを行っていく。これを受けて、本時のねらいへと児童の意識をつなげて自分事として考えられるようにする。

(4) 校内研修アドバイザーの招聘

校内研修のアドバイザーとして、2名の外部講師を計画的に招聘し、道徳教育の基礎的内容の講義や演習、ICT活用の留意点、授業研究会での指導助言など、専門家の立場から積極的に支援をしていただき、研究の充実を図る。

<校内研修アドバイザー>

- 久保 信行 氏（群馬大学共同教育学部附属教育実践センター）専門：道徳教育
- 紺谷 正樹 氏（群馬大学共同教育学部附属教育実践センター）専門：ICT活用

(5) 教師の協働による授業づくり

本校の実態として、教職経験年数を問わず「道徳の授業に自信がない」「発問を練り上げる経験が少ない」という意識をもつ職員が多かった。そこで本研究では、授業を見合い、協働で授業をつくることが重要であると考え、一人一研究授業の実施を原則として、授業づくりの段階から、職員を高学年ブロック、低学年ブロック、特別支援ブロックの3つに分け、協働で発達段階等を踏まえた授業構想を練ることができるようにする。

5. 研究実践

(1) 導入におけるアンケート資料提示

Googleフォームによるアンケートの実施



アンケート結果の提示・共有

(2) 導入における問い掛け



「□（四角）に入る言葉は何ですか」



「この絵を見た第一印象は何ですか」

(3) 多面的・多角的に考えるための発問

<登場人物の心情や考え、行為の意味を明らかにするために用いた基本発問の例>

共感的発問

- ・〇〇はどんなことを考えていたか。
- ・〇〇は△△の時、どんな気持ちだったか。
- ・〇〇はどう思っているか。
- ・〇〇と同じ気持ちになったときはないか。

分析的発問

- ・〇〇はどのようにして□□と言ったか。
- ・〇〇はどのようにして△△したのか。
- ・△△からどんなことがわかるか。
- ・どんな気持ちから〇〇はそうしたのか。

<自分事としての意識を高めるために用いた中心発問の例>

投影的発問

- ・あなたなら、どう考えるか。
- ・あなたなら、どうするか。
- ・あなたなら、何と言うか。
- ・あなたなら、同じようにできるか。
- ・あなたが、もし〇〇だったらどうか。

批判的発問

- ・あなたは、〇〇がしたことをどう思うか。
- ・あなたは、〇〇の生き方をどう思うか。
- ・あなたは、〇〇にどんなことを言うか。
- ・あなたは、この話に納得できるか。
- ・あなたは、〇〇に考えに賛成か、反対か。

(4) 交流活動

① 話し合いでの視点の明確化

- ・ねらいに沿った交流が行われるように、授業のどの発問で交流活動を取り入れるかを熟考し、話し合いの視点を絞り、共通理解を図ってから話し合いを行った。

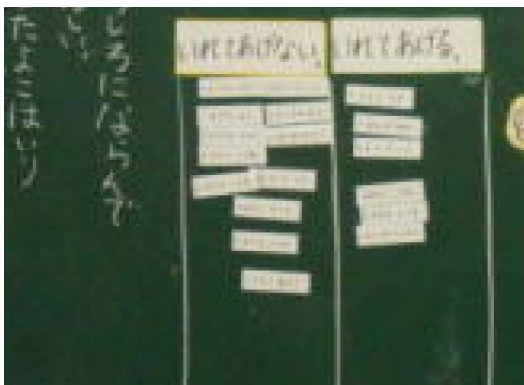


話し合いでの視点の提示



グループでの交流

② 自分の立場や考えの明確化・考えの可視化（思考ツールの活用・ICTツールの活用・ネームプレートの活用）



ネームプレートによる立場の明確化



ICTを使った立場や考えの明確化

(5) 校内研修アドバイザーの招聘

＜アドバイザー支援内容＞

回	来校日	支援内容
1	5月24日(水)	講義「魅力ある道徳授業をつくる」 演習「道徳におけるICT機器の活用」 資料提供「道徳で使えるシンキングツール」
2	6月29日(木)	授業参観(第5学年道徳)・授業研究会 指導助言
3	7月12日(水)	授業参観(第1学年道徳)・授業研究会 指導助言
4	8月29日(火)	模擬授業(第1・3・6学年)・指導案検討 指導・助言
5	10月2日(月)	授業参観(第4学年道徳)・授業研究会 指導・助言



アドバイザーによる講義



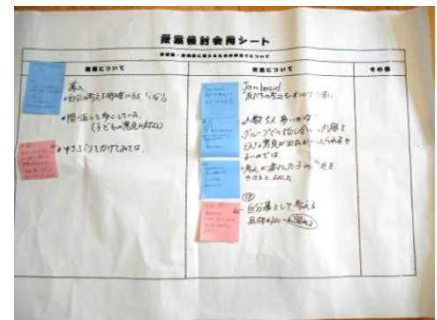
アドバイザーが加わった授業研究会

(6) 教師の協働による授業づくり

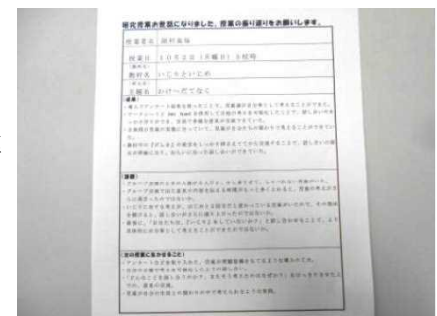
① 話し合いの視点を明らかにした授業研究会

授業研究会では、研究主題に沿った話し合いができるよう、下記のような視点をもって話し合い、今後の授業に生かせる成果や、課題に対して改善点を明らかにしていった。

授業研究会での視点
1. 発問に関して
①自分事として問題意識を高める導入の効果
②基本発問と中心発問の内容
③その他(問い返し、切り返し、考える時間等)
2. 交流に関して
①視点の明確化の効果
②考えの可視化の効果
③その他(思考を深めるためのコーディネート等)



授業研究会シート



授業振り返りシート

② 全員参加の授業研究会

『授業の関係で研究授業を参観できない』という問題を解消するために、研究授業を動画で記録し、それを視聴してから授業研究会を行った。また授業研究会で明らかになったことは授業研究会シートや授業振り返りシートにまとめて共通理解を図り、次の授業づくりへとつなげていった。

5. 成果と課題

<成 果>

- ・導入において、その時間の問題意識を高められる資料提示や問い掛けを行ったことで、考えがぶれずに、その時間のめあてを意識した発言や書き込みを行う児童の姿が見られた。
- ・自分事として考えられることを重視した発問計画を練ったことで、児童の本音を引き出すことができる場面が増えた。その積み重ねにより、より深く考えることができる児童が増えた。
- ・自分の立場や考えを可視化しながら話し合いを行ったことにより、意見の交流が活発になり、様々な考えを共有できるようになってきた。それにより、自分の考えに固執することなく、考えを広げていこうとする児童が見られるようになった。

<課 題>

- ・中心発問において、投影的発問や批判的発問を用いて多角的な視点を捉えさせようとしたが、低学年では発問の意図が十分伝わらずに考えの深まりが見られない場面があった。発達段階に応じた言葉選びや理解を補助するための手立てを考えていく必要がある。
- ・発問に対して、想定外の考えが出てしまったとき、その場に応じて「切り返し」を行うなどの補助発問をすることができない場面があった。児童の実態を十分に把握すると共に、様々な場면을想定した補助発問の引き出しを増やしていけるようにする必要がある。
- ・児童の意見をつなげて思考を深めていくことができる、教師のコーディネート能力を高めていく必要がある。